

<日本レジャー・レクリエーション学会第44回学会大会

シンポジウム 於：立教大学>

オリンピック/パラリンピックレガシーと明治神宮の風致

田中伸彦¹

The Olympic/Paralympics Legacy and Landscape of Meiji Shrine

Nobuhiko Tanaka¹

1. はじめに

評論家/出版人として知られる山本七平は、日本社会が「空気」と「水」で表現できると指摘した。実際、我々日本人は、絶えず周囲の「空気」を読んで顔色をうかがい、不都合なことは「水」に流すことで世間との折り合いをつけてきた。

この日本人の心性は、良くも悪くも作用する。良い面としては第二次世界大戦後の復興が挙げられる。当時、日本では経済回復のための「空気」が国民を支配し、世界に類を見ない高度成長に成功した。その最中に開催されたのが、1964年の東京オリンピックである。

しかし、その高度成長/オリンピックの華々しさの陰で、我々は江戸時代からの伝統を「水」に流した。悪い面の典型例としては、水の都の象徴であった潤いある江戸の堀割を埋め立てて殺伐とした環境に変えてしまったことや、江戸の交通の起点であった日本橋を首都高速で覆ってしまったことなどが挙げられよう。

つまり、高度成長を達成しなければならないという「空気」が支配する中で、江戸時代から続く日本の伝統的レガシーをあっさり「水」に流し、(昭和当時の)最先端の価値観に基づくシステムへと塗り替えてしまったのである。

実のところ、1964年の東京オリンピック当時、レガシーを後世に残すという認識は非常に希薄であった。一方、時を経て2020年に開催される東京オリンピック/パラリンピックでは、開催国としてレガシーを残すことが明確に求められてい

る。過去の歴史を踏まえないまま、不都合なこと、空気にそぐわないものを「水」に流すことは許されない状況にあるといえよう。

以上のことを鑑みて、本報告では、上記の歴史や現実を念頭に据えて、レガシーというキーワードに着眼し、「明治神宮」を題材に、風致的観点から、造園学/空間計画の立場にたって話題提供していきたい。

2. レガシーとは何か？

「スポーツ振興は、意図的ではないにせよ、結果的に東京の風致を損ない続ける歴史となっていないか?」、「本当に日本人にレガシーを継承/創造できるのだろうか?」という問いかけを、本報告では皆様に提示したい。

2020年オリンピック/パラリンピック招致が決定し、日本中が活気ある空気に包まれていることを、私自身も肌で感じている。「お・も・て・な・し」の精神をはじめ、日本人の心の中にある文化を共有し直す良いきっかけになったとも思っている。しかし、オリンピック・レガシーという言葉が新聞やテレビなどで見聞きするたびに、「本当に東京にレガシーなど残せるのか?」と、大きな不安を感じている。

本日はこの問いかけについて議論したいのであるが、その前提として、そもそもオリンピック・レガシーとは何なのかということ、まずはおさらいしておく必要があるだろう。

IOCの「Olympic Legacy 2013」によると、オリ

ンピック・レガシーとは「開催都市に残され得る、スポーツ、社会的、経済的、環境的な利益で、開会式前に経験されるものもあれば、大会終了後、数年が経っても目に見えない可能性もあるもの」と定義されている。

そして、オリンピック・レガシーの5つの性質として、

- (1) スポーツ・レガシー
(大会後も利用されるスポーツ施設、スポーツ参加人口の増加、競技力向上)
- (2) 社会レガシー (ユニバーサル)
(文化・歴史・生活様式のPR、誇りや社会的平等、教育、ボランティア、官民協力)
- (3) 環境レガシー
(公園や緑化スペース、都市再生、持続可能性)
- (4) 都市レガシー
(産業荒地等の都市再開発、景観整備、公共交通インフラ)
- (5) 経済レガシー
(経済向上、企業力、周辺経済効果、雇用、観光客の増加/観光産業の発達)

を挙げている。

レガシーとは、オリンピック競技そのものが与える記憶や感動だけではない。環境や交通インフラ、観光産業などについても言及されており、総合的なレガシーの創出が開催都市に求められていることが分かる。

具体的なレガシーの内容について、直近のロンドンオリンピックの事例で見ると、

- (1) 英国を世界有数のスポーツ大国にする
- (2) ロンドン東部地域の中心地を革新する
- (3) 青少年が地域のボランティア・文化・スポーツ活動に参加するよう鼓舞する
- (4) オリンピック・パークを持続可能な暮らしの青写真とする
- (5) 英国が、住む人や観光客、事業者にとって、創造的かつ社会的に寛容で、快適な国であることを世界に示す

という項目を掲げていた。

ロンドンで目標としたレガシーづくりは、概ね成功したと評判が高い。特に、ロンドンだけではなく地方都市の観光振興に貢献して国全体を巻き込んだことや、ロンドンの中で衰退傾向にあった東部地区の再開発が成功したことなどが評価されている。

日本でも、有形無形のレガシーを残すべく胸をはってオリンピック/パラリンピックを迎え、終了後もそのレガシーを受け継ぐ体制が持続する様に心がけなければならない。そのために、例えば造園学会や造園関連団体などの諸団体が連携して「TOKYO GREEN 2020 推進会議」を立ち上げて、後世に残せる東京の都市空間を提案しようという活動が進みつつある。

以上の様に積極的にレガシーに対する活動が、我が国でも展開されはじめていることを私も評価したい。しかし、これらの活動が本当にレガシーの継承に繋がるかということについては、どうしても不安が拭えないのである。その不安は、明治神宮を題材にすると説明しやすい。

3. 2020年は何の年か？

ここで皆さんに簡単な質問をしてみたい。

「2020年は何の年でしょう？」と。

もちろん東京オリンピック/パラリンピックの開催年という答えも正解である。ただ、オリンピック/パラリンピック関係者からこの答えしか出てこないのであれば、2020年以降に日本にレガシーが残るかという不安が更に増すのである。

2020年は、実は「明治神宮創建100年」の記念すべき年でもある。あの建て替え問題で揺れている国立競技場の膝元にある明治神宮は、2020年に創建100周年を迎えるのである。

明治神宮は、大正時代の人々が明治時代に思いを馳せて創建した、近代日本を象徴するレガシーの聖地である。その明治神宮が100周年を迎えるのである。このことは明治神宮を参拝すれば隠すことなく掲示されているし(写真-1)、100年前から分かっていたことである。

既に述べたとおり、この明治神宮外苑に隣接している国立競技場が、建築デザインの問題で大きく揺れている(注:戦前、国立競技場の敷地は明治神宮外苑の一部であった。戦後になって分割さ

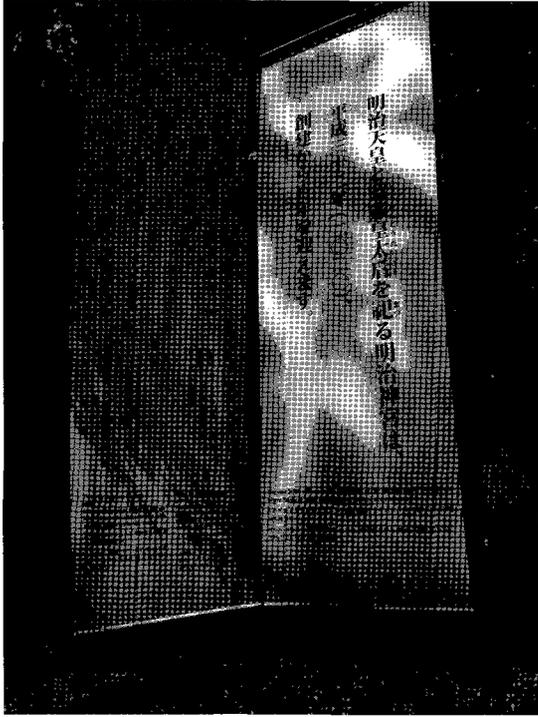


写真-1 2020年は明治神宮創建100年にあたる

れて国に移管された)。私個人の意見表明は控えるが、不思議なことに建築推進派からも反対派からも、オリンピック/パラリンピックに関わる議論の中で、100年を迎える明治神宮のレガシーをどの様に継承するのかについての話を聞かない。繰り返すが、明治神宮100年を記念する重要な年であるにもかかわらず、明治神宮の歴史にまつわるレガシーをオリンピック/パラリンピックにどの様に関連づけるのかといった話はずいぞ聞かないのである。

おそらく、多くの関係者は、2020年が明治神宮100年にあたることを知らないのではないだろうか。この様に過去のレガシーの検証すらしない状況で今度のオリンピック/パラリンピックを開催して、後世に繋がるレガシーなど構築できるのだろうか。過去を振り返ることに頭がまわらないまま、これまで維持されてきたレガシーを2020年で「水」に流し、21世紀の「空気」に任せるがまま、新たなシステムを構築してはいけない。それでは1964年の東京オリンピックから何ら進歩していないことになる。そして、この様につくられつつある施設やシステムは、何十年後かには

次の新たなイベントで打ち捨てられてしまうのではないだろうか。

4. 明治神宮の風致からレガシーを考える

明治神宮内苑は、100年前、演習地であった土地に人の手で植樹した人工の森で囲まれている。それが今では、威厳のある和風の樹林に成長している（写真-2）。一方神宮外苑は洋式の庭園様式を取り入れた近代的な造形で、特に絵画館前の銀杏並木が美しい（写真-3）。



写真-2 明治神宮内苑の参道



写真-3 神宮外苑絵画館前の銀杏並木

つまり、下記のとおり、和・伝統の「内苑」、洋・現代の「外苑」という空間構成になっていて、明治以降の日本の近代化を象徴する空間構成が印象的である。内苑も外苑も、海外に、日本の近代化というレガシーを伝える絶好の場所なのである。

内苑:古式様式による伝統美の庭園 (国費で造営)

「神苑と林泉を調和させた造園」

献木と人の手で創られた森 (常緑広葉樹林)

外苑:現代式庭園 (民費 (寄付等) で造営、後に明治神宮に寄贈)

「明快にして、快適な散策園ないしは記念園」

ピスタ景観 (絵画館銀杏並木)・プール・ボール

厳かな風致の形成

閑静な環境下における競技場の導入

2020年の東京オリンピック/パラリンピックと特に関係が深いのは、神宮外苑のほうである。洋風・現代の「外苑」は、幾度かの計画変更を経て創建6年後の1926年に全体が完成した。当時の神宮外苑の平面図は写真-4のとおりである。この時点で神宮外苑には陸上競技場や野球場などの施設が、近代スポーツの象徴として整えられていたことが分かる。ただし、これらの競技場は、お祭り騒ぎを想定していない。あくまでも閑静な風致的空間の中で行うことが前提とされていた。

また、外苑中央の絵画館前大芝生地 (注:本来の芝生地は近代ドイツ式で、人が立ち入ることを前提としていない) を核として、中央の緑量を薄くし、だんだん同心円状に濃くしていった外周植栽は濃密にしていく空間構成で創られた。スポーツ施設は外苑の中でしゃべることは想定されていなかった。

しかし、第2次世界大戦後の米軍接収などの経緯を経て、中央部の芝生空間も野球場と化してしまった。現在ここで野球をする人に悪意はないのであろうが、結果的には近代日本の風致を維持するという大正人の願いを反故にしていることに間違いは無い。

つまり、明治神宮外苑の風致は、スポーツをする人々に「庇を貸して母屋を取られる」という状態になって、閑静な空間が消滅してしまった状況にある。

明治神宮外苑に行く機会があったら、是非「何処が小汚いか」を、探してほしい。私の場合は、多くがスポーツに関わるもの (無粋な建物やフェンス)、あるいは東京オリンピック (1964) 開催に関わるもの (首都高など) が、どうしても目障りにうつってしまう。神宮外苑の西側は、風致面

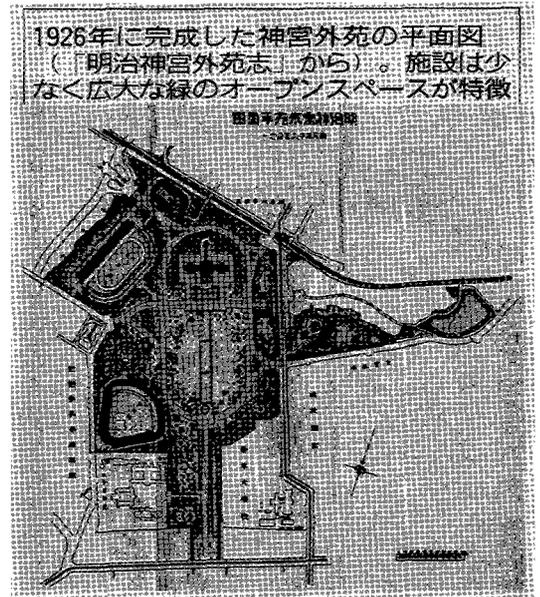


写真-4 1926年時の神宮外苑の平面図
(出展: http://udf-tokyo.com/weblog/?attachment_id=4774)

からは本当に残念な空間になってしまったと思う。

大正人が残した「明治のレガシー」を復元し、後世に残していくのは、我々の責務ではないだろうか？

神宮外苑を造営した明治神宮奉賛会が、外苑を明治神宮に寄贈する際に、下記のとおり「外苑将来の希望」が明文化されている。

今や外苑全部を貴職 (注: 明治神宮宮司) に引継ぐに方り、将来御注意を請うべき条々左に申入置候

- (1) 外苑は明治天皇及昭憲皇太后を記念し、明治神宮崇敬の信念を深厚ならしめ、自然に国体上の精神を自覚せしむるの理念を基礎とし、一定の方針を以て設計造営せられたるものを以て、今後、之が管理及維持修理上に於いても常に右理想を失はざる様御注意あり度事
- (2) 外苑は…上野、浅草両公園の如きとは其性質を異にするを以て、今後、外苑内には明治神宮に関係なき建物の造営を遠慮すべきは勿論、広場を博覧会場等一時的使用するが如き事も無之様御注意あり度候

神宮外苑は賑わいの空間ではないこと、イベント等期間限定であってもお祭り騒ぎのために一時使用をして欲しくないことなど、明治神宮の風致を守るための切実な願いが明文化されて残されている。今回の2020年東京オリンピック／パラリンピックの招致活動では、この事実が無かったことのように、綺麗に「水」に流されていることが非常に気にかかる。過去のレガシーを顧みることを忘れた人々に、将来のレガシーを創り出せるとは到底思えないのである。

5. コンペのやり方とレガシーの残し方

今回、明治神宮外苑は、新国立競技場のコンペが、賛否両論で非常に大きな注目を浴びている。反対意見としては、以下の様な意見が表明されている。

- ・非常に粗雑なコンペだったのではないか
- ・車庫に入らないスーパーカー
- ・本義の「都市計画家」が必要
- ・環境資産を食いつぶしてきた東京
- ・都市も建築も、歴史の重みに向き合いながら
- ・議論なしにいつのまにか変わっていく東京の景観
- ・スポーツ界の発展は神宮外苑のおかげなのに軽視している
- ・神宮外苑は狭すぎる
- ・外苑は緑の公園、建築用地ではない

上記の指摘はもっともな感想だと私も思う。一般の見地から考えても、今回のザハ案の競技場はオーバースケールであったし、上記で述べた大正人のレガシーが頭の片隅にでもあれば、そもそも今回の様なコンペにはならなかったであろう。このコンペは、都市計画上の地区計画の変更を踏まえて設計されているので違法ではないが、法令をクリアすることとレガシーが残ることは違う。

コンペという点では、1964年の東京オリッピ

クでは、レガシーを残そうとする良い方式で行われていた事例がある。それは選手村の役割を果たし、その後に公園に転用された「代々木公園」のコンペである。以下が募集要項（抜粋）である。

「東京都市計画代々木公園は、オリンピック東京大会後は、東京都唯一の森林公園として造成される。この地域は渋谷副都心と新宿副都心との中間に位置し、明治神宮内苑とともに極めて重要な区域である、従ってより良い公園に造成するため、その計画設計を懸賞募集するものである。」

つまり、明治神宮内苑の森林とあいまって樹林を形成する様にと、風致的観点の配慮がしっかりと明記されている。今年、代々木公園は、デング熱騒動による休園などに見舞われて災難の年であった。しかしその様な状況を差し引いても、代々木公園が、大規模緑地の少ない東京のレガシーとなり、多くの人に活用されていることに異論は無いであろう。

5. おわりに

以上、神宮外苑を題材に、東京オリンピック／パラリンピックのレガシーについて考えてみた。

私が言いたいことは、現在の「空気」だけで突き進み、先人の強い思いに耳を貸さずに振り返らないまま、過去を「水」に流して消し去ってしまう現在のやり方で本当にレガシーがつくれるのかということ皆さんに改めて考えて欲しいということである。

明治神宮外苑は、西側の部分や絵画館前の芝地が無粋なスポーツ施設に侵食されているとは言え、まだまだ都内では風致や美観が保たれている貴重な空間だと考えられる。その様な風致を継承することこそ21世紀の東京のレガシーづくりにとって価値があるのではないだろうか。

皆さんに一考願いたい。

